

第3章

公共ホールにおける教育プログラムと その評価

猪股正幸

基本方針を持たずに行われてきた公共ホールの教育プログラム

1990年代以後、公共ホールにおいていわゆる「教育プログラム」が実施されることが多くなってきた。その内容は、年少者や青年を主な対象にした芸術と触れ合うことを目的としたものから、高度な芸術的スキルの教授を目的としたもの、あるいは講義形式による芸術をテーマとした連続講座、さらにはアーティストを施設の外へ派遣してプログラムを実施するアウトリーチ型のものまで、多種多様である。関係者の努力もあり、その質および量の向上には目覚ましいものがあり、いまや充実した教育プログラムを実施することは、優れた公共ホールの条件のひとつまでになった観さえある。

しかし意外なことに、ホール、行政、そして経費負担者である市民の間で、「なぜ公共ホールが『教育プログラム』を実施するのか」という、その目的についての共通理解は、いまだに形成されていないように思われる。公共ホールにおける教育活動の多くは、数少ない幸せな例外を除き、多くの場合、ホールの活動をより豊かなものにしようという、意欲あるトップや企画職員独自の取り組みによって行われる。しかし、この動きがあらかじめ定められた施設の運営方針やビジョンに則ったものであることはまれで、行政サ